

# 考古学研究会 第 65 回総会

2019 年 4 月 20 日（土） 岡山大学創立 50 周年記念館

## －総会次第－

- |                    |                        |
|--------------------|------------------------|
| 1. 開会挨拶            | 6. 2019 年度活動方針（案）      |
| 2. 議長選出            | 7. 2019 年度予算（案）        |
| 3. 2018 年度各委員会活動報告 | 8. 2019 年度常任委員選出       |
| 4. 2018 年度会計報告     | 9. 2019 年度会計監査委員選出     |
| 5. 2018 年度会計監査報告   | 10. 2019－2020 年度全国委員選出 |

## －2018 年度活動報告－

### 〔総務委員会〕

総務委員会では、事務局と連携して、常任委員会・全国委員会の運営、財務管理、ホームページ管理のほか、各方面との連絡・交渉を滞りなく実施した。

会員数は 2019 年 3 月末現在 2738 人で、昨年同期の 2849 人から 111 人の減であった。入会者数 39 人、届け出による退会 78 人、会費滞納による退会 72 人である。依然として会員の減少傾向は継続しており、その原因は退会者の相対的な多さである。今年度は入会案内を刷新するなどの取り組みを行ったが、今後も新入会員を増やす努力を続けていきたい。

常任委員会は、通常通り月 1 回開催した。出席者数は平均 13 人である。

財政面では、予算を予定通り執行した。広告収入は本年も積極的な呼びかけが奏功し、予算以上の収入を得た。

全国委員の活動では、各地の声や地域情報を会運営に反映させるため、「全国委員つうしん」への投稿呼びかけを継続している。委員の協力を得てつうしん 13 本を掲載することができた。また次年度改選に向け準備を進めた。

そのほか事務局の運営面では、事務局員の雇用条件等の整備に向け、検討を進めた。

### 〔編集委員会〕

本年度も例年通り年 4 回、会誌を定期刊行した。

研究面では、全体で論文（総会研究集会報告含む、以下同じで省略）と研究ノートを合わせて 16 本、総会講演 1 本、総会事例報告 1 本を掲載した。総本数は昨年度より 2 本増である。研究対象時期は縄文・弥生・古墳時代への偏在が際立っている。総会関連の論文を除くと、古代以降では、沖縄地域を対象とした中世・現代の研究に限定された。

展望では、今年度も引き続き「学校と考古学」の問題に教育現場の視点から迫る原稿を掲載した。その他に、災害や文化財保護に関する問題、そして前年度に本会が発した「共謀罪」の問題を受けての視点など、まさに現代社会と考古学が直面する諸課題に関連した原稿を数多く掲載することができた。最終的に特集・連載企画も含めて合計 19 本となり、充実し

## 2018年度末会員動向

都道府県	2017年度末会員数	2018年度末会員数	増減
九州・沖縄	297	280	-17
沖縄	20	19	-1
鹿児島	41	41	0
宮崎	23	23	0
熊本	37	34	-3
大分	19	17	-2
長崎	13	12	-1
佐賀	29	27	-2
福岡	115	107	-8
四国	114	113	-1
愛媛	38	40	2
高知	14	14	0
香川	35	34	-1
徳島	27	25	-2
中国	323	306	-17
岡山	140	132	-8
広島	58	56	-2
山口	32	32	0
島根	50	47	-3
鳥取	43	39	-4
近畿	773	748	-25
兵庫	138	133	-5
大阪	205	194	-11
滋賀	58	58	0
京都	137	134	-3
和歌山	27	26	-1
三重	53	49	-4
奈良	155	154	-1

都道府県	2017年度末会員数	2018年度末会員数	増減
中部・北陸	372	363	-9
愛知	90	89	-1
岐阜	35	35	0
長野	48	42	-6
山梨	18	19	1
静岡	67	62	-5
福井	22	22	0
石川	39	40	1
富山	21	20	-1
新潟	32	34	2
関東	724	693	-31
東京	249	244	-5
埼玉	114	106	-8
神奈川	120	115	-5
千葉	98	92	-6
群馬	70	68	-2
栃木	31	28	-3
茨城	42	40	-2
東北・北海道	228	218	-10
福島	37	35	-2
宮城	55	54	-1
山形	19	16	-3
秋田	17	16	-1
岩手	25	25	0
青森	19	19	0
北海道	56	53	-3
海外	18	17	-1
計	2,849	2,738	-111

増減・・・2018年3月31日現在の会員数に対する増減

た内容となった。

書評・新刊紹介は合計15本を掲載した。各号での掲載数にばらつきはあるが、昨年度からの積極的な取り組みを継続し、全体的には掲載本数を伸ばすことができた。

考古フォーカスでは、国内・海外ともに幅広い地域の遺跡を掲載したが、例年と比較すると、国内遺跡の掲載数が若干高い結果となった。

会活動の情報発信を担う委員会つうしん・全国委員つうしん・会員つうしんでは、毎号1～2ページの分量を掲載した。委員会つうしんは1回の掲載となったが、全国委員つうしん・会員つうしんは3～4回の掲載を達成することができた。

2018年度（第65巻第1号～第4号）の会誌構成は以下のとおりである。総頁数483頁、論文11本、研究ノート5本、総会講演1本、総会事例報告1本、展望19本、書評・新刊紹介15本、考古フォーカス8本（国内5本・海外3本）、委員会つうしん1回、全国委員つうしん4回（合計13本）、会員つうしん3回（合計5本）である。本年度の論文・研究ノートの内訳を時代別に分けると縄文5、弥生4、古墳3、古代以降3（古代1・中世1・現代1）で、その他に外国1を含む。

2018年度に投稿された論文・研究ノートは18本であった。今年度掲載したものについて投稿から掲載までにかかった時間は平均8カ月で、修整にそれほど時間がかからない場合は約5カ月、長いもので12カ月であった（総会研究集会報告を除く）。

#### 〔企画委員会〕

企画委員会が所掌する文化財保存・「陵墓」問題・平和歴史教育の3部門について、それぞれの活動の概要を報告する。

文化財保存に関するところでは、文化財保護法の改正と今後の課題に関する展望記事が会員より寄せられた(258号、260号)。また、2018年7月豪雨による岡山県倉敷市真備町の文化財の被災状況について会員より情報が寄せられた(258号)。

「陵墓」問題では、歴史学・考古学研究諸団体16学協会と連携し、立入り観察、調査見学及びそれらの運営に積極的に携わった。7月7日に陵墓関係16学協会の全体会議、宮内庁との折衝に委員2名を派遣した。限定公開や小規模な工事立会い学は、会誌に報告記事を掲載した(258号、259号、260号)。また、委員会通信欄で企画委員会の「陵墓」問題に関する取り組み方針を説明した(259号)。

また、平和歴史教育部門での活動として、連載企画「学校と考古学」の第2部を「学校教育制度と考古学」というテーマで(257号、258号、259号)。第3部を「考古学教育の将来像」というテーマで記事を掲載した(260号)。この企画は261号で終了する予定である。2月11日には、例年のごとく『「建国記念の日」を考える県民の集い(岡山)』に参加した。参加記は261号に掲載予定である。なお、2017年度の参加記は、2018年6月発行の257号に掲載した。

#### 〔デジタル化対応委員会〕

活動方針であった「会員相互情報交流のためのSNS」と「会務お知らせ機能」を統合したSNSを新たに開発、公開した。また、こうした情報の接続のため、会員からの情報や会運営の会務に関する情報を一元化するシステムとして統合型のCMSを開発した。結果、会員は共通の問い合わせフォームから問い合わせることで、直接的に常任委員会の会議システムにアップロードされ各委員会での議論を開始できるようになった。

また、会員情報についても、その一元化を推進した。会員に固有のIDとパスワードを送付し、そこからログインすることで、会員個人で情報管理が可能とした。これまで、事務局で受付—管理—更新してきた個人情報も、統合CMSで管理できるよう、各会員がSNSから「会員個人情報のページ」で管理するシステムを実装した。

学会誌のデジタル化と学術リポジトリの準備については、継続的に、デジタル化対応委員においてPDFファイル化ならびにテキストデータ化を継続して進めている。現在、既刊のほぼ全てのPDFファイル化を終了し、テキストデータの判別作業の確認を継続している。あわせて、ハーベスティングに対応するJUNI12基準対応のメタデータ整理を実施した。

#### ※用語説明

- ICT・・・「Information and Communication Technology(情報通信技術)」の略で、通信技術を活用したコミュニケーションをさす。
- SNS・・・「Social Networking Service」の略で、この場合ICTを介した、会員相互(一般には友人関係など)のつながりや、コミュニティ形成と拡大を推進する技術をさす。
- CMS・・・「Content Management System」の略で、Webページの記述言語であるHTMLやCSSを運用す

るためのシステム全般をさす。

Web・・・インターネット上で標準的に用いられている、文書の公開・閲覧システムをさす。

HTML・・・「HyperText Markup Language」の略で、ウェブページを作成するために開発された計算機言語をさす。現在のインターネット上に公開されている情報のそのほとんどは、この HTML によって記述されている。

CSS・・・「Cascading Style Sheets」の略で、ウェブページのスタイルを指定するための計算機言語。また、CMSにおいては、相互の情報の接続や構造化（関連づけ）を定義する。

リポジトリ・・・「Institutional Repository」（学術リポジトリ・機関リポジトリ）とも呼ばれる。大学等の学術研究機関で生産された電子的生産物を保存・公開することを目的としたシステムで、オープンアクセス（研究成果を誰もがいつでも無料で利用できる）という考え方に沿って無料で公開するものをさす。

ハーベスティング・・・機関リポジトリ運営の為、コンテンツ（デジタル化された会誌データ）のメタデータ（項目：例えば著者名や題名など）を国立情報学研究所が定期的に各機関リポジトリ（各所に分散アーカイブされているデータ）から必要情報を参照関連づける作業をさす。

JUNII2・・・ハーベスティングに際して、日本国内でデファクトとして推奨されているハーベスティング対応のメタデータの基準をさす。この JUNII2 に対応したメタデータを、コンテンツと合わせてサーバーに保持することで、定期的にハーベストされ、様々な検索サイトや OPAC などから記事にアクセスできるようになる。

OPAC・・・「Online Public Access Catalog」の略で、図書館利用者が図書館内の端末や自分のパソコンを使ってアクセスし、オンラインで検索することができる図書館蔵書目録をさす。

#### 〔法務委員会〕

情報セキュリティポリシーに関する事項として、デジタル化対応委員会と連携し、「SNS」「統合 CMS」「リポジトリ」「会員情報」それぞれにセキュリティポリシーが必要であることを確認し、その整備を開始した。また、統合 CMS に関する研究会としてのポリシーの問題を整理し、学術リポジトリへのアクセス権限を付与するための会員 ID とパスワード管理方法を確認し、各会員に発送した。

学術リポジトリ公開に関する著作権法の整理と法律相談を実施した。具体的には、国立情報学研究所のハーベスティングの仕組みと、JUNII2 の法務処理の各学術機関での事例を収集し、これを比較、弁護士との相談をおこなった。なお今後の公開は、著作権放棄や譲渡は伴わない形で進めることを確認した。

#### 〔岡山例会〕

通常例会を 9 回、合同例会を 1 回開催した。

通常例会は各回 2 本の発表をおこなった。内容は国内外における研究成果を取り上げ、時代は縄文 1・縄文以降 1・弥生 6・古墳 6・古代 1・近代 1、海外 2（ベトナム、中国）であった。2018 年度は中四国地域における注目すべき発掘調査成果を取り上げることができ、会誌の「考古フォーカス」にも掲載された。ただし、時代的には弥生～古墳時代に偏ってしまったことは反省点であり、今後他の時代の発表も取り上げていく必要がある。また、2018 年度は中四国地域の全国委員から最新の調査・研究に関する情報をいただき、発表に反映させることができた。また 3 月例会では大学院生の研究発表を取り上げることができ、若い世代の参加者増にもつながってきている。

第 2 回合同例会では 4 例会が合同で企画し、「須恵器受容・普及の実態」と題して開催し

た。議論の主題を①須恵器生産開始期の時期と器種組成②須恵器の消費形態に置き、須恵器選択の意図やその背景について各地域の様相を比較検討した。中四国以外からの参加者も多く、活発な議論が展開された。第3回は2020年度に開催予定である。

年間を通じた参加者は、通常例会が313名、合同例会が81名、合計394名であった。今後も中四国地域を中心とした最新の調査・研究動向を注視し、例会での発表・議論をより活発な会活動へとつなげていきたい。

2018年度の発表題目、参加者数は以下の通りである。

5月12日(土) 参加者60名

岡山大学考古学研究室「岡山市津倉古墳の発掘調査」

澤田秀実「吉備南部の前期古墳」

6月9日(土) 参加者29名

那須浩郎「縄文時代の植物のドメスティケーション」

高田健一「鳥取市・直浪(すくなみ)遺跡からみた鳥取砂丘と人間活動の変遷」

7月14日(土) 参加者33名

近藤 玲「纏向遺跡出土の桃核ほかと土器付着炭化物の炭素14年代法による年代測定について」

高上 拓「石清尾山古墳群の調査成果と積石塚の構造」

9月8日(土) 参加者29名

大川泰広「史跡青谷上寺地遺跡第17次発掘調査の概要について—大阪湾型銅戈を中心に—」

吉田 広「弥生時代の小型青銅利器について」

10月13日(土) 参加者44名

ライアン・ジョセフ「鉄製武器と吉備の古墳出現期社会」

米田克彦「古墳時代玉生産の変遷と地域性」

11月10日(土) 参加者43名

石貫弘泰「今治市新谷・新谷古新谷遺跡の調査成果について—弧帯文土器を中心に—」

池淵俊一「出雲地方出土の吉備系土器について」

12月8日(土) 参加者19名

下江健太「青谷横木遺跡出土の女子群像板絵について」

津村宏臣「南洋諸島の戦跡考古学—山本五十六搭乗機とブーゲンビル島の戦跡—」

1月26日(土) 第2回合同例会「須恵器受容・普及の実態」参加者81名

コーディネーター：寺前直人・田中清美

岡田裕之「山陰・山陽地域における須恵器の受容と普及—古墳時代の儀礼・祭祀と食器—」

中久保辰夫「近畿地方における須恵器の受容と普及—古墳時代の饗宴と土器生産—」

大西 遼「東海地方における須恵器の受容と普及—尾張・三河・伊勢の窯跡出土資料を中心に—」

藤野一之「関東地方における須恵器の受容と普及—須恵器生産と使用の場面—」

討論

2月9日(土) 参加者27名

黄 曉芬「ベトナム交趾郡の政庁都市を掘る—古代東アジア文明の新発見—」

南 健太郎「鏡の使用方法からみた東アジアの文化伝播」

3月2日(土) 参加者29名

加治木智也「弥生時代前期末から中期前半の土器にみられる小地域化のプロセス

—瀬戸内地域の甕を対象として—」

三輪紘士「古墳時代中・後期の南四国における煮炊形態—スス・コゲの分析から—」

[関西例会]

本年度、関西例会は大阪、京都、奈良、滋賀、兵庫、和歌山をめぐり、隔月開催を基本として6回の例会を実施した。研究報告および調査報告で扱われた時代は、弥生時代2、古墳

時代5、古代3、中世1である。発表者は、若手・中堅研究者を中心にお願いし、調査報告では開催場所の考古学最新情報を学ぶことができるようにつとめた。関西例会は開催場所に世話人を設けて、発表者等を検討しているが、各地世話人の尽力によって安定的な運営と深まりのある内容が継続できている。

参加人数は以下の通りであり、学生および若手研究者が例会参加者の多くを占める傾向は続いている。例会後、欠かさずにひらいている懇親会も、最新の研究や発掘調査情報、ときには就職情報などの交換の場となっている。関西例会はこの先も考古学談義が尽きない場でありたい。

なお、2018年度の事務局は滋賀県立大学考古学研究室が担当した。

2018年度の発表題目は以下の通りであり、参加者合計は167名である。

第212回 6月16日(土) 吹田市男女共同参画センター 参加者33名

研究報告：小野寺洋介「古墳における土製模造品儀礼の成立と変遷」

調査報告：早川圭「高槻城跡二ノ丸北辺部の発掘調査」

第213回 7月21日(土) 長岡京市生涯学習センター 参加者33名

研究報告：菅博絵「単龍鳳環頭大刀について」

調査報告：福山博章「木津川市岡田国遺跡の発掘調査成果について」

第214回 10月7日(土) 奈良市ボランティアインフォメーションセンター 参加者20名

研究報告：相馬勇介・荒田敬介「弥生時代における河内湖南岸域のパイオニアと葬送儀礼ー近大山賀遺跡第五次発掘調査の再整理よりー」

調査報告：南部裕樹「東大寺東塔院跡の発掘調査ー天平の創建と鎌倉の再建ー」

第215回 11月24日(土) 和歌山県立紀伊風土記の丘 参加者11名

研究報告：荻野谷正宏「紀伊半島南部における前・中期弥生土器の展開と地域間交流」

調査報告：川口修実「藤並城跡の発掘調査成果ー中世方形居館の調査報告ー」

第216回 2月2日(土) 草津市立まちづくりセンター 参加者35名

研究報告：仲田周平「近江における穹窿頂持ち送り式石室の研究」

調査報告：小谷徳彦「東山遺跡の発掘調査ー紫香楽宮関連の新発見ー」

第217回 3月23日(土) 神戸市勤労会館 参加者35名

研究報告：木村理「出土埴輪からみた古墳時代地域経営の展開とその意義ー古墳時代中期における近畿北部地域を中心にー」

調査報告：青山航「姫路市網干区高田の前田遺跡と中筋遺跡についてー遺構の概要と遺物についてー」

#### 〔東海例会〕

8月と2月に2回の例会を開催した。今年度も開催県の全国委員・例会委員が主体となり、開催内容の決定、資料の作成、例会の運営を行った。また、例会開催前に東海地区の全国委員と例会委員が集まり、会の運営について協議した。第31回は地域ごとに円筒埴輪を中心とした編年が整理され、討論では淡輪系・尾張系等の系統把握を中心に活発な議論が展開された。第32回は古墳の構築技法について地域ごとに事例が網羅的にまとめられ、構築技法の採用にあたっては古墳被葬者の階層性を含め多様な理解がなされた。

2018年度の発表題目は以下の通りである。

第31回 8月4日(土) 名古屋大学 参加者84名

<東海の埴輪ー出現と終焉、地域性を探るー>

三田敦司「地域報告① 三河の埴輪」

浅田博造「地域報告② 尾張の埴輪」

酒井将史「地域報告③ 美濃の埴輪」  
宮原佑治「地域報告④ 伊勢・志摩・伊賀の埴輪」  
鈴木一有「地域報告⑤ 遠江の埴輪」  
藤村 翔「地域報告⑥ 駿河・伊豆の埴輪」

第 32 回 2 月 9 日（土）静岡大学 参加者 44 名

<東海における古墳時代の土木技術を考える>

田村隆太郎「遠江・駿河・伊豆における埴輪構築方法の変遷」  
山中美歩「浜松市光明山古墳発掘調査の成果について」  
天野雄矢「三河・尾張における古墳時代の土木技術の状況」  
島田崇正「美濃における古墳の築造技術について」  
高松雅文「伊勢における古墳時代の土木技術の状況」

〔東京例会〕

2018 年度は、それぞれ古墳時代、弥生時代、若手研究会をテーマとした 3 回の例会を開催した。昨年度より会員の参加費の割引を導入したことにより、参加会員数の把握が可能になったが、参加者に占める会員の割合が以前よりも高くなっている印象を受ける。長らく課題であった会員への開催周知が奏効し定着をみているようである。また、今年度の若手研究会では、初めて関西の学生による報告も行われた。地域の枠を超えて若手研究会の存在と意義が認知されてきているといえよう。

第 47 回東京例会「古墳時代東日本における渡来文化のルートとルーツ」

日時：6 月 30 日（土）13:00～17:00 会場：國學院大学渋谷キャンパス 2 号館 2101 教室

参加者：90 名（一般 59 名、会員 19 名、学生 11 名、学生会員 1 名）

【調査報告】深澤敦仁（群馬県立歴史博物館）「群馬県渋川地域における渡来文化の諸相」

【研究報告 1】小林孝秀（松戸市立博物館）「東日本の渡来文化・渡来人」

【研究報告 2】高田貫太（国立歴史民俗博物館）「海の向こうからみた古墳時代の東日本」

第 48 回東京例会「宮ノ台期の再検討—南関東の弥生時代中期後葉の集落を中心に—」

日時：11 月 24 日（土）13:30～16:40 会場：明治大学駿河台キャンパス リバティタワー6 階 1065 教室

参加者：87 名（会員 30、学生会員 0、一般 49、学生 6、不明 1）

【趣旨説明・報告 1】石川日出志（明治大学）「宮ノ台期の再検討」

【報告 2】田村祐太（明治大学卒業生）「堅穴住居址の重複・近接関係から見た鶴見川流域遺跡群の再評価」

【調査報告 1】當眞紀子（君津市教育委員会）「君津市鹿島台遺跡—宮ノ台期房総の大規模集落—」

【調査報告 2】大島慎一（小田原市）「小田原市久野遺跡群—足柄平野の丘陵上集落—」

第 49 回東京例会「第 5 回若手研究者による研究報告会」

日時：2019 年 2 月 17 日（日）10:30～17:10 会場：駒澤大学 大学会館 246 7 階会議室

参加者：60 名（会員 20 名、学生会員 4 名、一般 10 名、学生 26 名※不明を含む）

【震災関連報告】 禰亘田佳男（文化庁）

「これからの日本の埋蔵文化財行政—行政と大学の連携についても—」

【研究報告 1】生山優実（大正大学修士 2 年）

「縄文時代前期末の気候変動期における社会変化」

【研究報告 2】本澤 航（埼玉大学博士前期課程 1 年）

「縄文食性研究における定量的復元方法の検討」

【研究報告 3】山田凜太郎（京都大学博士後期課程 3 年）

「東北地方の縄文時代後晩期における哺乳類利用」

- 【研究報告 4 森本 司（駒澤大学修士 2 年）  
「磨製石斧からみた弥生時代中期後半における南関東地域圏の形成」
- 【研究報告 5】園原悠斗（立命館大学博士課程前期）  
「弥生時代における石鏃の変遷とその意義－近畿地域を中心に－」
- 【研究報告 6】雨宮健祥（東京大学修士 1 年）  
「銘文の字形からみた三角縁神獸鏡の製作工人－表現①とその周辺－」
- 【研究報告 7】櫻井 条（専修大学修士 2 年）  
「古墳時代関東における鉄器生産の導入と展開」
- 【研究報告 8】吉田めぐみ（國學院大学 4 年）  
「古代の環境変動に伴う井戸遺構の展開－平城京城を中心として－」

### 2018年度本会計収支決算 (2019/3/31)

収	入		支	出	
	予 算	決 算		予 算	決 算
会費	11,000,000	10,473,968	印刷費	4,500,000	4,130,067
図書売上	150,000	170,930	手数料	20,000	12,065
広告費	100,000	130,000	通信運搬費	1,500,000	1,540,052
資料代	350,000	402,200	負担金・補助金	155,000	13,240
雑収入	75,000	76,101	人件費(給与・賞与)	2,500,000	2,267,160
			人件費(アルバイト)	80,000	68,664
			社会保険料	16,000	16,888
			事務所維持費	1,200,000	1,145,282
			旅費	1,300,000	1,265,354
			会議費	250,000	263,951
			消耗品費	200,000	159,908
			雑費	20,000	0
			予備費(災害対策関係経費を含む)	6,490,152	0
デジタル化対応事業特別会計より繰戻し金		522,628	デジタル化対応事業特別会計へ繰入	3,800,000	3,800,000
過誤納		1,000	返金		1,000
(小 計)	11,675,000	11,776,827	(小 計)	22,031,152	14,683,631
前年度繰越金	10,356,152	10,356,152	次年度繰越金		7,449,348
計	22,031,152	22,132,979	計	22,031,152	22,132,979

### 2018年度基金会計収支決算 (2019/3/31)

収	入	支	出
前年度繰越金	6,056,738	デジタル化対応事業特別会計へ繰入	1,500,000
利息	52	振込手数料	864
計	6,056,790	次年度繰越金	4,555,926
		計	6,056,790

### デジタル化対応事業特別会計収支決算

収	入		支	出	
	予 算	決 算		予 算	決 算
基金から繰入	1,500,000	1,500,000	Webサイトシステム制作	4,700,000	4,700,000
本会計から繰入	3,800,000	3,800,000	旅費	550,000	77,372
			会議費	50,000	0
			本会計へ繰戻し		522,628
計	5,300,000	5,300,000	計	5,300,000	5,300,000

### 2019年度本会計予算案

収	入	支	出
会費	10,600,000	印刷費	4,500,000
図書売上	200,000	手数料	30,000
広告費	100,000	通信運搬費	1,800,000
資料代	350,000	負担金・補助金	100,000
雑収入	75,000	人件費(給与・賞与)	2,600,000
		人件費(アルバイト)	80,000
		社会保険料	16,000
		事務所維持費	1,160,000
		旅費	1,150,000
		会議費	200,000
		消耗品費	180,000
		雑費	20,000
前年度繰越金(2018年度以降の会費前納額含む)	7,449,348	予備費(災害対策関係費含む)	6,938,348
計	18,774,348	計	18,774,348

### 2019年度基金会計予算案

収	入	支	出
前年度繰越金	4,555,926		
		次年度繰越金	4,555,926
計	4,555,926	計	4,555,926

— 2019 年度活動方針(案) —

考古学研究会は、「考古学研究の創造的発展とその成果の普及、民主的学風の建設」を目的としています。設立から 60 数年経て、膨大な情報とともに多様・複雑化する現代の国際社会においても、揺らぐことなく、この目的に向けて着実に活動を進めていきます。

そのためには、本会は考古学研究の発展への寄与とともに、文化財行政や歴史教育に関する大きな改革に対しても積極的に関わり、災害・防災における文化財保護、社会資源としての文化財の活用、緊張する世界情勢のなかの平和歴史教育の推進など、現代社会における考古学の諸課題に取り組みます。また、これらの活動を通じて、会員相互の交流、関係諸学会・研究会や地域社会とのつながりを促進し、会活動の拡大を目指します。さらに、学会・研究会を取り巻く厳しい社会環境において、いかに会の活性化、安定的な運営が可能となるか、知恵を結集し、その対策を進めます。

会誌編集では、質の高い研究論文、最新の考古学、文化財情報を掲載し、学校教育や災害など常に新しい視点に留意し、多角的な情報発信に努めます。例会活動は、各地域の最新の動向を意識しながら企画運営を行い、会員活動のさらなる活発化をはかります。また、インターネットを通じた様々な情報の集積と公開をすすめ、考古学、文化財の社会化に関わっていきます。

こうした基本方針をふまえ、各委員会は以下の活動方針を掲げます。

〔総務委員会〕

- ・適正かつ円滑に会運営の遂行にあたる。
- ・全国委員と連絡を緊密にとり、会員や地域の情報の積極的な把握と会誌掲載化を進める。
- ・会運営の効率化、会員サービスの向上につとめる。
- ・新入会員の獲得につとめる。

〔編集委員会〕

- ・定期刊行を堅持する。
- ・質が高く会員の関心に即した内容の論考を積極的に掲載し、会誌の学術水準の維持に努め、学界の発展に寄与できる会誌づくりに励む。
- ・文化財行政や教育、学問の自由の堅持などの社会的問題、災害と考古学の関係などに留意し、会員相互の情報発信や議論の場となる会誌づくりをめざす。
- ・書評や新刊紹介のほか、最新の成果や議論に関連する記事の掲載に配慮し、会員の研究活動の活発化に資する。

〔企画委員会〕

基本的にこれまでの方針を継続・発展させていく。

- ・考古学研究と現代社会との関わりを注視し、会誌上でさまざまな議論が繰り広げられるよう企画提案に努める。埋蔵文化財行政一般だけでなく、平成 23 年（2011 年）東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）、平成 28 年（2016 年）熊本地震、平成 30 年 7 月豪雨（西日本豪雨）災害をはじめとする大規模な災害にかかわる復興調査について、今後の方向性と必要な体制等の整備に関する議論を積極的に進める。
- ・改正文化財保護法の施行にともなう埋蔵文化財保護の動向について情報収集と検討を行う。
- ・平和歴史教育についても、従来の取り組みを継承しつつ、今後も積極的な議論の場を用意していく。
- ・「陵墓」の保全と管理をめぐる 40 年にわたる議論を振り返りつつ、持続的な活動を進めるとともに今後のあり方を検討する。

#### [デジタル化対応委員会]

- ・ SNS を用いた会員からの情報の公開促進と新しい会員の声を反映する仕組みを検討する。2017 年度に実施されたデジタル化対応委員会アンケート結果の詳細な分析報告を SNS を通じて公開する。
- ・ SNS を用いた会員相互の情報交流の促進に努め、新入会員の誘引に努力する。
- ・研究会のホームページのリニューアルを実施する。SNS との連携や統合 CMS からの情報の公開を可能とする。
- ・ Web 会議室の運用を図り、必要に応じた情報公開に対応する。
- ・会員サービスとしてのデジタルコンテンツを拡充する。具体的には、論文・記事関連情報のカラー写真の公開や動画（ストリーミング）配信に関する技術検討と実装を試みる。
- ・学術リポジトリを順次公開、運用を開始する。できるだけ早い段階で CiNii Articles へのデータ連携を実現する。

#### ※用語説明

CiNii Articles . . . . 国立情報学研究所(NII)が提供する文献情報・学術情報検索サービスで、学協会刊行物・大学研究紀要・国立国会図書館の雑誌記事索引データベースなどの学術論文情報を検索できる仕組みをさす。

#### [法務委員会]

- ・デジタル化対応委員会と連携し、学術リポジトリ公開に関する法務処理を実施する。
- ・会誌記事の著作権者の調査を開始する。
- ・継続して、学術リポジトリの公開に関し推進する。
- ・情報セキュリティポリシーの発効を年度内を目処におこなう。

#### [例会委員会]

- ・各地域（岡山、関西、東海、東京）で通常例会を定期的を開催する。会のホームページや SNS などを通じて広報を早期に実施し、会員への周知を徹底する。
- ・例会活動は活発な意見交換を通じて、研究を深化させることを目的とする。地域・時代に偏りなく、参加者にとって魅力ある会になるように内容の充実を図る。内容の検討に際しては全国委員と連携し、各地域での多様な研究成果を発表に反映させることができるようにする。また例会活動を通して、会員間の交流と新入会員の獲得を促進する。
- ・学生や若手研究者による発表の機会を積極的に設け、若い世代の参加を促す。全国の会員諸氏への発信が期待される研究報告等については、会誌への投稿を勧める。
- ・考古学・文化財と社会の関わりについての問題に積極的に取り組み、例会活動に反映できるよう努力する。
- ・合同例会をはじめとした各地域の例会との連携を継続的に検討し、例会活動の活性化をめざす。

〔会計委員会〕

- ・引き続き適切な会計業務を遂行する

－2019 年度常任委員候補<五十音順>－

有賀祐史（赤磐市）・石川日出志（明治大学）・石丸恵利子（広島大学）・岩崎志保（岡山大学）・岩本崇（島根大学）・上田直弥（大阪大学）・岡村勝行（大阪市）・金田善敬（岡山県）・忽那敬三（明治大学）・小林青樹（奈良大学）・澤田秀実（くらしき作陽大学）・下江健太（鳥取県）・鈴木真太郎（岡山大学）・清家章（岡山大学）・清野孝之（奈良文化財研究所）・瀬谷今日子（和歌山県）・津村宏臣（同志社大学）・寺前直人（駒澤大学）・富井眞（京都大学）・富岡直人（岡山理科大学）・中井正幸（大垣市）・中川朋美（岡山大学大学院生）・中久保辰夫（京都橘大学）・新納泉（岡山大学）・西島庸介（安城市）・福井優（姫路市）・藤井翔平（岡山県）・別所秀高（東大阪市）・楨林啓介（愛媛大学）・松本直子（岡山大学）・光本順（岡山大学）・南健太郎（岡山大学）・三好元樹（志摩市）・向井佑介（京都大学）・村田秀石（倉敷工業高校）・山口雄治（岡山大学）・山本悦世（岡山大学）・吉田広（愛媛大学）・四田寛人（岡山県）・米田克彦（岡山県）・ライアン・ジョセフ（岡山大学） 以上 41 名（下線は新規候補）

－2019 年度会計監査委員候補－

出宮徳尚・野島永

－2019・2020 年度全国委員候補－

【沖縄・九州】辻田淳一郎（福岡）、重藤輝行（佐賀）、杉井健（熊本）、田中裕介（大分）、田中学（長崎）、甲斐貴充（宮崎）、新東晃一・中村直子（鹿児島）、山崎真治（沖縄）

【四国】梅木謙一（愛媛）、近藤玲（徳島）、宮里修（高知）、梶原慎司（香川）

【中国】北島大輔（山口）、妹尾周三（広島）、丹羽野裕（島根）、大橋雅也（岡山）、高田健一（鳥取）

【近畿】濱田延充（大阪）、肥後弘幸・若林邦彦（京都）、辻川哲朗（滋賀）、森岡秀人（兵庫）、豊島直博（奈良）、仲辻慧大（和歌山）

【東海・甲信】大谷宏治・山岡拓也（静岡）、穂積裕昌・小澤毅（三重）、梶原義実・樋上昇・長井謙治（愛知）、中山誠二（山梨）、原明芳・百瀬長秀（長野）、李浩基（岐阜）

【北陸】小林正史・林大智（石川）、高橋浩二（富山）、東村純子（福井）、橋本博文（新潟）

【東京】青木敬・車崎正彦・十菱駿武・杉山浩平・中村耕作

【関東】内山敏行（栃木）、栗島義明（埼玉）、田中裕（茨城）、武井則道・西川修一（神奈川）、林部均・藤尾慎一郎（千葉）、若狭徹（群馬）

【東北・北海道】佐藤由紀男（岩手）、相原淳一・藤澤敦（宮城）、菊地芳朗（福島）、渋谷孝雄（山形）、神田和彦（秋田）、上條信彦（青森）、瀬川拓郎・長沼孝（北海道）

以上 63 名（下線は新規候補）